

---

# **僕の歌声は、貴女だけの為に。**

水城翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の歌声は、貴女だけの為に。

### 【著者名】

N1232E

### 【作者名】

水城翼

### 【あらすじ】

ボーカロイド。それは、そのソフトのキャラクターが入力したとおりの歌を歌ってくれるというパソコンのソフトである。私が出会ったさまざまなボーカロイドの中で、もっともおかしな出会いをしたのが、ボーカロイドのカイトだつた。どんな出会い方をしたかは…ネタバレになってしまつるので小説の本文の方で…！

## プロローグ

ボーカロイド。

それは、そのソフトのキャラクターが入力したとおりの歌を歌つてくれるというパソコンのソフトである。

私が最初に迎えたボーカロイドは“MEIKO”だった。

メイコのソフトが家に来て、私はすぐにソフトのインストールを開始した。

インストールが完了すると、私は驚いて腰を抜かしてしまった。

「初めまして、マスター」

なんと、メイコが実体化したのだ。

茶色の短い髪に、赤い服。

パッケージどおりの格好で、私の前に立ちこつこつと微笑んでいる。

ソフトが実体を持つなどありえない。

だけど、実際今メイコは実体を持つている。

メイコに触ることもできたし（実際に触つてみた）、メイコと会話することもできるのだ（実際に会話してみた）。

どうしてか聞いてみたら、「そういうもんだ」とて返されて、私は  
あこまいに「はあ」としか言いようがなかつた。

まあ、メイコの説明はここまで。

今度はKAITOの話をするとしよう。

## プロローグ（後書き）

微妙な終わり方で申し訳ないのですが……いかがだったでしょうか？  
てか、まず謝ります。

ほんとにすみません（下下座）

二二 動画を見てはまつてしまつて……。

ボーカロイドの中ではカイトが一番好きです。  
ついこの間までたくカイトマスターになりましたよーー！  
てかカイト操作難しそうるよーーありえないよーー！  
ということなので更新が遅れるかもです。  
ごめんなさい（下下座）

## KAITOとの出会い

カイトは私が道端で拾ってきた（爆）、壊れかけたポーカロイドだつた。

実体化したままのバグが起きていたのだ。

メイコ達ボーカロイドはインストールしたパソコンを離れることは出来ない。

だからパソコンが家にある場合はメイコはせいぜい家の近くくらいまでしか実体化することは出来ないし、外でのパソコン所持の場合、近くにマスター（各ボーカロイドの所有者のこと）がいるはずだった。

カイトの周りにはそれらしき人物が見当たらなかつた。

だから家につれて帰つた。

がちゃり

家のドアを開けると、メイコがすぐに走つてくる。

「マスター、おかえりなさ……！？」

メイコが息をのんだ。

帰ってきた私の背中のカイトを見て、

「それ…“KAITO”ですか…？」

そう言った。

「そう。壊れてたし、周りにマスターが見当たらなかつたからつれて帰ってきたの。」

「すぐ傷がありますね。」

私が拾つてきたカイトの外見は酷かつた。

体中傷だらけだつたし、指が何本か外れて、赤い線や青い線が何本か飛び出でいた。

メイコがカイトを運ぶのを手伝ってくれながらカイトの指をまじまじと見つめる。

「直りますか？」

メイコが心配そうに話しかけてきた。

「うん。多分、外見はパソコンのソフトだからパーツの取替えくらいで済むと思う。でも」

「でも、何ですか？」

「でも、この外見から思うに、多分このカイトは前のマスターにかなり酷い目に合わされていたんじゃないかなって思うの。きっと精神

の方へのダメージのほうが酷いと思つ。」

「アンインストールしてみてはどうですか?」

アンインストールして、もう一回インストールしてしまえば、ボーカロイドの記憶は消える。  
メイコはそれを利用しようつゝ、といつのだ。

「そうね…。」

カイトのアンインストールは、失敗した。

どこでも実体でいられるバグが原因のようだつた。

精神のダメージは、私達と暮らしているうちに癒えてくれればいい、  
と願いながら私はカイトの修理を始めた。

私は機械の仕事に携わつてゐる。

なので、カイトは無事に意識を取り戻した。

しかし、目が覚めたカイトの様子はおかしかつた。

## KANTOの玉露ご（後書き）

はじめで読んでくれてありがとうございます。  
なるべく早めの更新を図りたいなっていますので、どうぞよろしくお願いします。

## 存在理由

予想は、していた。

でも、現実はそう甘くはなかった。

カイトが田を覚ましたかと思うと、いきなりその綺麗な蒼い瞳を大きく見開いて恐怖の色をにじませ、奇声をあげた。

そうしたかと思うと、瞳に涙をにじませ、カイトは自分の腕を頭を守るよひにして覆った。

いきなりのカイトの行動に戸惑いながらも、私はカイトを安心させようと話しかけようとした。

そして気付く。

カイトが小さく、何かを言つていることを。

耳をすまして、カイトが何を言つているのか確かめた。

……。

聞かなきやよかつた。

……聞かなければ、このカイトの前のマスターへの怒りも少しで済んだというのに……！

カイトは、じつ囁いていたのだ。

「『みんなさい、壊さないでください』……と。

許せない。

許せなかつた。

ボーカロイドのマスターは、そのボーカロイドの歌声を必要とし、ボーカロイドを家に迎える。

そして、家に迎えられたボーカロイドは、マスターに愛情をもらい、そしてより人間らしく歌つてくれるようになる。

つまり、マスターに必要とされなくなつたボーカロイドは存在理由をなくしてしまつことになるのだ。

自分で求めた歌声なのだから、最後まで責任を持つて愛情をそそぐべきだ。

それを、このカイトの昔のマスターは…。

私の目の前で頭を抱えて震えているカイトを見て、私は思わずカイトの頭に手を伸ばした。

## 存在理由（後書き）

毎日更新！！

とは言つてみたものの、あまりうまく行きやうにないです。  
明日くらいでふつり途切れるかもです。

僕の歌声は……。

「……カイト……」

私が伸ばした手に気付いたカイトは、  
バシツ……！

……私の手を振り払った。

「……あ……っ」

呆然とする私に、カイトは涙ぐんだ瞳でこっちを見て、小さく声を  
あげた。

「『』、ごめんなさ……ッ」

カイトがあわてて私に謝った。

……暴力を振るわれると思ったのかな……

「大丈夫だよ、カイト」

私はカイトを安心させようと、にっこりと微笑んで、カイトの頭を  
撫でた。

「私は貴方に危害は加えない。だから、そんなに怖がらなくていい  
んだよ？」

「……でも……ツー！」

カイトの頬を、綺麗な涙がツーッ、と伝つ。

「……怖いん、です。他人を、見ると、……みんなが、僕を……傷つけようとしてるって……思えて……ツー！」

そのカイトの涙は、カイトが生まれてから今までにどれだけつらい思いをしてきたかを、鮮明に物語つていた…。

「……うん。分かったよ。大丈夫。カイトが安心して暮らせるようになるまで、私はずっと待ってる。……私はカイトのマスターだもんね。」

そして私は、カイトに向かつて大きく腕を広げた。

いつでも私はカイトの味方だよ。だから、安心して。

そんな願いをこめて。

「今はつらくても、いつか幸せになれるときが来る。みんなで笑えるときが来る。……早く、そんな幸せな世界が訪れますように。ね？」

「…………マスター」

「……カイト……！」

今までずっと黙つていってくれたメイコが驚きを隠せないという声でカイトの名を呼んだ。

だつて。

カイトが…私のことを

“マスター”って呼んでくれたんだよ…！？

それは、カイトが私をマスターとして認めてくれた瞬間。

私はつい嬉しくて、カイトを抱きしめずつと泣いてた。

カイトは私を突き放したりせず、静かに私にこう言った。

「僕の歌声は、貴女だけの為に。」…と。

僕の歌声は…。（後書き）

なんか続く予定です。

え、てかもう終わった感じなんですが、もうちょい。  
タグに「初音ミク」つてつけちゃいましたし w  
ミク出さないとちょっと…  
てかKAITOばっかりでMEIKOのが…（汗）

## 「めんたい」

「……マスター。苦しいです」

「あ。「めんッ！…」」

カイトの苦しそうな「めん」声を聞き、私はあわててカイトから飛びのいた。

「「めんねつ、つ」。嬉しくて…」

「…嬉しかったんですね。」

私が照れ隠しで頭を搔くと、小さくカイトが言つた。

「え？」

「嬉しかったんですね。…マスターの優しさが。前は、…こんな」と  
あつませんでしたから。」

悲しそうに微笑んで、カイトが言つた。

「これからは、きっとマスターが愛情をこめてくれるわよ。…あ、  
私、メイコ。よひじく。」

今まで黙つていってくれたメイコが、笑顔でカイトに手を差し伸べた。

でも。

「…………めー、ちやん？」

カイトの瞳に、ふたたび恐怖の色が戻った。

カイトの瞳がぐらりとゆれ、乱暴にカイトは自分の頭を押さえつけ  
る。

その状態のままカイトは崩れ落ち、奇声を上げた。

「か、カイト！！」

私があわてて、カイトを揺さぶる。

「……ツ！……す、すみません！僕……」

気付いたように、あわててカイトが言った。

「ううん、大丈夫。それより、“めーちゃん”っていうのは……？」

「……昔の、マスターのところにいたMEIKOのことです……。僕以外の、唯一のボーカロイドでしたから、仲は良かったです。」

「……そう」

カイトは、誰に向かつて謝っていたのかな……？

“めーちゃん”に？

でも、カイトは“めーちゃん”に何か悪いことをしたのかな……？

……でも、聞かない。それ以上。

過去よりも未来。

だから、私は……。

## 1) めんない（後書き）

シリアルス一直線。

いつかもつと明るいカイトを書きたい（泣

明日…更新できるかな…

## 新しいボーカロイド達

カイトがメイドを見て謝りだした理由を世のマスターのところに  
た頃のことを思い出すから、と解釈した私は、完璧な新しい環境が  
必要だと考えた。

あの出来事があった次の日、私は“初音ミク”、“鏡音リン・レン”  
”を買った。

正直言つてお金が…なかつたけど…きつぱりこけるかなあ、と思い、  
思い切つて買ってしまつた。

すべては、カイトのために。

\* \* \*

「はじめまして、初音ミクですーーー！」

「鏡音リンです、よろしくお願ひしますーーー！」

「鏡音レンです。よろしく！」

ミク達をインストールして、これで六人大家族になつた。

「マスター、この子達…“VOCALOID2”ですか…？」

カイトがこそこそと耳打ちしていく。

「マスター…お金、大丈夫なんですか？てか、どこから来たんです

? VOCALOID2を一つも買つお金……

続いてメイコも耳打ちしてきた。

明らかにメイコが言つてきたことの方が色々と耳が痛い内容だったけど、それでも一人の表情がどことなく嬉しそうで安心した。

「一気に大家族になつて、にぎやかになりそうね！…ほら、二人ともあいさつしなきゃ！…」

「は、はい。そうですね、マスター。私はメイコ。よろしくね。」

「僕はカイト。よろしく。」

メイコはもううん、カイトまでもが本当に自然な笑顔でミク達に語りかけた。

「…よかつたあ。」

「え？」

「マスターが、優しそうなひとで。お兄ちゃんとお姉ちゃんが優しそうなひとで。リンちゃんとレン君が一緒で。よかつた！！！」

ミクが満面の笑顔で言つので、私達の間に自然と笑顔が広がった。

「これから、よろしくお願ひします！…」

## 新しいポーカロイド達（後書き）

しばらく更新しなくてすみません（汗）  
いや、リアルが忙しくて…  
ていうかリンちゃんとレン君の影が薄くてごめんなさい。  
嫌いなわけじゃないんです。  
むしろだいすきですよ。

次、きっと出番増えますよ。やつ信じてますよ。

「おはよー、みんな！……ってあれ？」

「お、おはよーいります……ますたー……」

私が寝室から出て、みんなの部屋に行って様子を確認して。それで挨拶をしたら返ってきたのはカイトの声。

カイトを見ると、カイトの目はクマ。つてか目が死んでる。

カイトにへばりついて気持ちよさそうに寝息をたててるのはYOKOLOHOMAのミク・リン・レンの三人。

状況からすると、きっとカイトは夜中に興奮して眠れないずっと二人の話を聞いていて、寝るに寝れなかつたつてオチだらう。

「カイト、大丈夫？」

「は、はい……なんとか。」

私が聞くと、カイトが弱弱しく答える。

「…あ。おはよーいります、マスター。」

「おはよーいマーゴ。…で、昨日、何があったの？」

マイコがミク・リン・レンの寝室からこぼれる部屋に来て挨拶をしてきた。

私はマイコに事情を聞いてみた。

「あー…。昨日、ミク達が自分の部屋で始めは寝ていたんですが、急にカイトと寝たいって言い出して…。ミク達が私達の部屋で寝る代わりに私はミク達の部屋のままで寝ていたんです。」

ちなみに、ボーカロイド達の部屋は“ VOCALOID ”組と“ VOCALOID2 ”組に分けてある。

男部屋と女部屋に分けたほうがいいかな…。

今度希望を聞いてみることにする。

「あ、ちなみ。今日は私と、明日マスターと一緒に寝るやつですよ」

「まんとこっ」

「…ふあ？…むかむか…あひひ…。」

ミクが畳をじすりながら半分寝抜けたようすで起きてきた。

それに続き、リン、レンも起きてきた。

## 口算（後書き）

久しぶりの…更新ですね。  
すみません。許してください。  
これからもこのようなことはあると思いますが、…どうか見捨てな  
いでください…（泣）

ありがとう

「よし、みんな起きたようだから、早速レッスンを始めぬよ。」

「わーいっ！」

主にVOCALOID2のみんなが歓喜をあげた。

「そうはせずとも、カイトとメイコも嬉しそうにしているのが目に見えてわかる。」

「ほんとは年長組のふたりからレッスンする予定だつたんだけど……。カイト。カイトは寝ていいよ。疲れたでしょ？」

私はカイトとメイコの一人に目を向けて言った。

「あ…。すみません」

カイトが頬を赤らめて言つた。

「じゃ。メイコ、いくよ。」

卷之三

卷之三

リンとミクが手を振つて見送る。  
レンはカイトと何か話をしていた。

「……つ、あの！マスターつ！！」

と、後ろからカイトの声がした。

くいっ

後ろが引っ張られる感覚がした。

「カイト…？」

振り返つてみると、すぐ後ろにカイトがいる。  
服を引っ張っていたのはカイトだった。

「どうしたの？」

カイトのまわりに向き直り、私はカイトの頭を撫でた。  
頬を赤く染めて、目にまつむらさうと涙を浮かべてカイトがこわいを  
みつめる。

「…ありがとうございます」

ぽつりとカイトが言つた言葉に、私は思わず考え込んでしまつた。  
私、お礼を言われるようなことしたかな…？

「…どうして？」

「マスターが、僕のこと気にかけてくれたのが…嬉しかったんで  
す。」

マスターがボーカロイドのことを気にかけるのは当然だ。

それなのに…。

「ちょっと休んだら、すぐにレッスンしちゃうね。」

私がそいつてカイトの頭を撫でると、カイトは頬を赤らめてうつむいた。

「…はい。」

あいがどつ（後書き）

今の僕のカイト脳内設定…赤面症の泣き虫野郎。  
ああ…ダメですね。  
すみません。

## マイコの場合

「……うんつーよし、」のくらいかな？さすがマイコ。調教も少しで済んだし。音程もよく取れてる。さすが年長者。えらいえらい。」

マイコのレッスンはスムーズに進んだ。

ボーカロイドの中で一番扱いに慣れているためか、それともマイコがまた成長したか。そのどちらか、あるいは両方だ。

「あの……マスター。」

「ん？ 何？」

練習がひと段落し、休憩をとつていたとき、「マイコがおずおずと話を切り出してきた。

「ここなどきに重つのもどうかと思つたんですけど……カイトのことで、お話が……」

「なにになに？ 言つてみ。」

「はい。……最近は、平氣なんですけど……ほら、前、あつたじやないですか……その、カイトが、私を見て……正確には、カイトは、『めーちゃん』に謝りだした……事が。」

「……うん」

「あれからも、少しそんなことが……あつたんです。寝起きとか……一回。あと、たまに口を押さえてうずくまつたり……」

それを聞いて、私はかなり驚いた。驚いて思わずその場に立ち上がる。

「吐き気とか！？そんなになるまで…？」

そんな私を見上げて、メイドは冷静な瞳のままじつ囁いた。

「……違つと思こます。ボーカロイドは吐き気は感じません。そのよつにしつくられでこまか。」

「……じゃあ……ビーハード…？」

「……今分…叫び声を出せなことひじこるんだと思こます。…マスターに嫌われないよつ」

「……え…？」

「これはあくまで推測です。でも、もしも私が同じ立場に立たされたのなら同じ行動をとつます。」

「……ひ、じめん…よく、わからんこんだけど…ビーハード…叫び声をあげなこことが私に嫌われないことにつながるの…？」

「…初めて、ああいひことがあつたとき…マスターは、戸惑つていましたよね？」

「戸惑いは…こつしかあきれに変わると感じたのですよ…あきれらたしかに…いきなりのことじで、私は驚いた。…でも…なんで…？」

れる＝嫌われる。嫌われる＝存在理由を失くす。これが私たちボーカロイドの方程式です。」

ボーカロイドは歌うためだけの存在。

歌えなくなる、歌を奪われることはつまり、存在理由を失くすこと。  
その歌を紡ぐ“マスター”という各ボーカロイドの所有者に使われ  
なくなることもつまり、存在理由を失くすことにつながる。

…そんなことって…。

「最近、カイトの様子はどう?」

「はい。最近は私と話していくても、少しきこちないですが、前より  
は自然だなあって思えるようになりました。ミク達が来てからは本  
当に生き生きとしていますよ。」

「そつかあーーーあ、そつだ」

「部屋、男部屋と女部屋に分ける?」

「…はい、お願ひします…」

## マイヒの場合（後書き）

兄さんもといカイト買いました！！

やつたね！ついに買つたよ！！

小説更新が遅いのはカイトと遊んでいたからでs

ごめんなさい。

\* \* \*

増えましたね、ボカラ口小説。

嬉しいかぎりです。

なんかひとつだけ浮いた話で悲しい（涙

あとカイトのこと語り合える人がリアルでもネット内でもできる  
といいなあ…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1232e/>

---

僕の歌声は、貴女だけの為に。

2010年10月9日13時29分発行